

華嚴淨土義

中 村 薫

華嚴經は大乗菩薩道を説く經典である。それは中国華嚴教學が、

特に十地品若しくはそこに出ずる頌偈を中心として基礎づけられたことによつても明らかである。その様な意味からすれば、華嚴經は聖道自力の教義を説いたものと云える。しかし、その菩薩道を成立せしめている基本的内容を看取すれば、一概にそう規定できない。

寧ろそれは表面的な見方で、その含蓄された内容を知了すれば多分に淨土他力義が開顯される。元々、華嚴經は仏自身が説くのではなく、必ず普賢等の菩薩を代表せしめて、「皆承_三威神力_二」等と云つて仏の自内証そのものを巧みな表現を以て説いている。これについて賢首法藏は、探玄記卷三で「普賢一説即一切仏説也」（T 35・156・a）と云つている。而も八会中、二会七会八会を除く諸会に於いては「加持」と云つて仏力を借りて説いている。この「皆承_三威神力_二」について世親は十地經論卷一に於いて、二種の弁才を述べるに当り「他力弁才者。承_三仏神力_二故」（T 26・125・b）と云い、

法藏も華嚴經盧舍那品の「是皆盧舍那仏本願力故」（T 9・403・b）の文を他力と解して探玄記卷三で「仏本願者明_三仏往昔會見_二是事_一。因即發_レ願願今成也。」（T 35・15・c）と説明を加えている。蓋し、これら他力、本願力の語句により、直ちに「承_三威神力_二」「加持」即淨土他力義と観るのは早計であり、もう少し華嚴經と淨土教師

との關係について考察しなければならないであろう。

華嚴教學の伝承者について、凝然の「五教章通路記」（T・72・297・a）巻一によつて観るに、五祖、七祖、十祖の三説挙げている。元より、中国仏教は立教開宗を主とすることにより、一宗にのみ執して共同することは希であつた。ところが印度の論師は一宗一派に拘泥せず、等しく諸宗の祖師とされている。よつて今は通路記中の十祖説を取り、就中淨土教にとつても深厚な關係にある馬鳴・竜樹・世親の印度三師について考察していくこととする。

先ず馬鳴は「大乘起信論」の著者とされている。その起信論は、一心二門三大四信五行の法を説き、大乘仏教の理論と実践とを明かし、衆生心の解明を目的としている。その一心の法とは取りも直さず真如・如来藏としての一心である。その論に「是故、三界虚偽唯心所作」（T 32・577・b）とあるが、これは華嚴經十地品の「三界虚妄但是心作」（T 9・558・C）の文によつており、華嚴の一心と起信論の一心法との体は全く同一なる真心と考えられる。他方、起信論は

当_レ知如来有_三勝方便_二。撰_三護信心_一。謂以_三專意念_レ仏因縁_二。隨願得_レ生_三他方_二仏土_一。常見_三於_二仏_一。永離_三惡道_二。如_三修多羅説_二。若人專念_三西方極樂世界阿彌陀仏_一。……云々（T 32・583・a）

と説き、その教義は漠然とした感があるが、念仏とか西方極樂世界阿彌陀仏とかいう語をみて、大乘仏教復活と專意念仏の実行を教え、淨土往生義を宣揚した点が伺われる。

竜樹については、八宗の祖と云われるが如く、その思想全体を述べることは筆舌に尽し難いものがある。ただ法藏が探玄記巻一で竜樹既將_三下本_二出因造_三大不思議論_一。亦十万頌以_レ釈_三此經_二。今時十

住毘婆沙論は彼一分。……(T 35・122・b)

と述べているが如く、十地品に相当する菩薩十地(二地まで)の修行を詳説した大不思議論の一部分たる「十住毘婆沙論」を著わしている。竜樹はまた初歡喜地を立場として発心と念仏とを見出し、これを般若の空觀に於いて菩薩道の基礎とし、その易行品に於いて

仏法有無量門^一。如三世間道有難有易。陸道步行則苦、水道乘船則樂^二。菩薩道亦如是(T 26・41・b)

と説き、菩薩の修行に難易二道を分ち、しかも念仏によつて阿惟越致と惟越致との菩薩道を統一的に体系づけ、判教の網格を成している。他方、「大乘二十頌論」(T 30・26・a・c)に於いて三界唯心を明かし、十地品の「三界虚妄但是心作」の文を以て、一心は縁起を転ずる心となり、滅するの心であると解している。更に智度論卷三十(T 25・27・b)に於いても、華嚴經の上に自身の唯心思想を見出していることが伺われる。以上の如く竜樹の華嚴經の奥底に潜める淨土教義を發揮し、弥陀易行の教義を達意的に説いた功績は古来より注目されている。

世親は淨土三經の通申論と云われる「淨土論」の著者であるが、法藏が探玄記卷一

世親菩薩造十地論。偏釈十地一品(T 35・122・b)

と述べているが如く、十地經(十地品)を釈した「十地經論」の著者でもある。その十地經論卷第八に

但是一心作者。一切三界唯心転故。云何世諦差別。随順觀世諦^一即入第一義諦。(T 26・169・a)

とあるが、世親は十地品の「但是一心作」を以て三界は唯心の転ずるところと解し、これを随順し世諦を觀じて即ち第一義諦に入ると

している。更に「唯識三十論頌」等に於いても正しく「三界唯心」の義を安立し、自ずから三界唯識たる教學を体系づけている。

以上の如く觀てくると、印度の三師に於いては共々十地品の「三界虚妄但是心作」の文を中心課題として、而もそれを依処として淨土他力義を説いていることになる。これは華嚴經が各宗の教理の基礎に生きているとも云えるが、就中竜樹の易行品を中心として華嚴經の淨土義を觀れば、前後の馬鳴・世親も華嚴淨土義を認めていたと云つても過言でないだろう。且つ淨土教に関する文が華嚴經に幾つも見られる点に於いて、如何に華嚴經そのものが淨土教として觀られるべき要素を持つているかが如実に知らされる。

今は華嚴經に現われている念仏三昧・西方極樂・阿弥陀仏等の一々の問題については割愛しなければならないが、そもそも華嚴經は高尚円満なる如来所証の無尽法界の法門を説いて、人をして之に証入せしめることにあつた。しかし、その法界に悟入するには、我々は無辺の方行を修さなければならず、それは困難なことであり、容易にいつまで経つてもその果を得ることはできない。故に我々が悟入すべき要路はただ西方往生にあると、普賢の西方願生の法門

願我臨欲命終時^一 尽除一切諸障礙^二 面見彼仏阿弥陀^三

即得往生安樂刹^四 我既往生彼國已^五 現前成就此大願^六

一切円満尽無餘^七 利樂一切衆生界^八 (T 10・848・a)

を以てその終結としていることは大変意味深いことである。

斯くして、教學華嚴に於ける信滿成仏の如く原理的なことが云えるには、經中にこの様な宗教的とも云える淨土義を含んでいることが認められて始めて、単にそれが原理として止まらず、我々をして仏たらしめることが可能となると思われる。